



プロフィール

1950年生まれ。文学修士、博士(情報科学)。専門分野は英語学・英語教育。30年以上に亘って、英文法研究と大学英語教育の実践に携わっています。1976年東京教育大学大学院文学研究科修士課程を修了後、北見工業大学一般教育等人文系(1976-1980年)に英語教員として赴任し、金沢大学文学部(1980-1984年)を経て、1984年東北大学教養部に着任しました。1987-88年フルブライト奨学生として米国マサチューセッツ大学アマースト校において言語理論の研究、1993年教養部改組に伴い大学院情報科学研究科人間社会情報科学専攻(1993-2004年)に配属されました。2004年に大学院国際文化研究科国際文化言語論専攻に移り、2005年から2007年まで国際文化研究科長、東北大学教育研究評議会評議員を務めています。現在、高等教育開発推進センター全学教育推進部において、東北大学における英語教育の現状と課題の分析に取り組んでいます。

研究内容

◇大学英語教育の課題と対策

カリキュラム開発と英語授業内容の質的改善は、大学英語教育にとって避けられない課題となっています。日本の英語教育には「英語そのものを教えること」と「英語を通して他の知識を教えること」という二つの側面があります。前者は英語表現を理解、創造するのに十分な語学的技能を備えること、後者は異文化の理解をはじめ教養や思考力を身につけることです。

十分な文法知識と豊かな語彙力は、学術研究のために欠かせない基礎能力です。また、国際的な感覚と知識に溢れ、ア

カデミックな環境で求められるコミュニケーション能力に優れた学生を育成することは、時代を超えた大学の使命の一つです。したがって、大学英語教育のカリキュラム編成では、語学教育とそれに基づく教養教育のどちらにも配慮して適度なバランスを保つようにすることが重要です。さらに、常に現行のカリキュラムを見直し、新しい教育実践の方法を具体的に実践するプログラムを開拓していくことも必要です。カリキュラム編成は大学の教育観に応じて異なるものですが、研究に力点を置く大学では、「学術目的の英語」教育を基本方針とすれば、英語教育改革の本質を見失うことはありません。

東北大学英語カリキュラム案

1 セメスター	2 セメスター	3 セメスター	4 セメスター
英語A1 Reading (必修1単位)	英語A2 Reading (必修1単位)	英語C1 Reading, Writing, Listening, Speaking, & Others (必修1単位)	英語C2 Reading, Writing, Listening, Speaking, & Others (必修1単位)
英語B1 Writing, Listening, Speaking (必修1単位)	英語B2 Writing, Listening, Speaking (必修1単位)	専門英語1	専門英語2

TOEFL → 学部・大学院



CALL 教室

メッセージ

◇学ぶ側が何を求めているかを、常に考慮した授業を

日本の大学では外国語教員の大半が外国語教育と専門研究の二つを掛け持ちしています。残念ながら、大学の習いとして、外国語教育が高い評価を受けることはありませんでした。大学院重点化などの大学改革がその傾向に拍車をかけるのではないかと危惧していましたが、大学の内外で外国語教育の重要性が以前にも増して強く認識されるようになり、私たち外国語教員の大学における教育的役割と責任もそれだけ大きくなりつつあると実感しています。

ただ、授業はさらに上を目指すための土台作りだということ

を知っておいてください。ですから、学校の英語の授業は何の役にも立たないと言われると胸が痛みます。英語に上達するには、授業以外のところで大変な時間と努力をかけなければならないのです。どんなによく工夫されているカリキュラムであっても、学ぶ側に自主的に勉強を続けていこうという気持ちを起こさせなければ、よいカリキュラムとは言えません。そのためには、教える側には、常に学ぶ側が何を求めているかを考慮しながら、何をどのように教えるかを考えていくことが求められます。